

♪ 2017年度 **poco a poco** ♪

Nr. 3 2017年5月11日(木) 文責：プファイル・辰巳

あした天気になあれ！

今週は少し良いお天気になりました。5月といえば、ドイツで一番安定した天気になる月ともいわれているのに、変わりやすいお天気が4月から続いていました。畑のイチゴたちも、お日様の光を恋しがっていることでしょう。



早くイチゴ摘みができるくらい、暖かくなってほしいですね。

さて学内では、部活動の体験入部が始まり、児童会・生徒会も動き出しました。この後は、中学部の中間試験を経て、いよいよ運動会に向けての取り組みが本格的になりますね。それぞれの種目練習、そして応援団練習と忙しくなりますが、みなさんががんばってくださいね。

音楽こぼれ話 <作曲家のこの一曲 ①

モーツァルト「ヴァイオリンソナタ K.304」>

今年度のこぼれ話は、辰巳が独断と偏見で選んだ「作曲家のこの一曲」で連載していく予定です。有名な作曲家は、たくさんすぐれた作品を作曲し、それを後世に残しており、どれが一番優れた作品かなどと優劣をつけることはできませんし、1曲だけを選ぶというのも難しいことです。ですが、曲の背景となるエピソードなどを紹介しながら、その作曲家自身や彼らの作品に興味を持っていただけたら・・・と思い、このテーマを選びました。

第1回目はW. A. モーツァルトの作品「ヴァイオリンソナタ K.304」です。作品番号のKはケッヘルという人の名前の省略形です。ケッヘルさんはモーツァルトの作品を彼の死後、整理し、作品番号を付けたので、モーツァルトの作品にはKを付けて、ケッヘル番号と呼んでいます。

35年という短い生涯の中で、600曲以上の作品を残した天才モーツァルトは、バッハやベートーヴェンのなどの厳格な作品群に比べると、軽快で明るい

曲が多いのが特徴とされています。ところが、このヴァイオリンソナタは、とても哀しく、憂いを秘めた響きで演奏されます。特に第2楽章の出だしのピアノは、ため息と涙と一緒に出そうなほど、美しい旋律です。

モーツァルトがこの曲を作曲したのは、1778年、モーツァルト22歳の年です。まだウィーンに移住する前で、彼はこのとき、ちょうど母と共に、パリに滞在中でした。ところが、このパリ滞在中に、母アンナ・マリアが突然その地で客死するという不幸に見舞われたのです。

アンナ・マリアはパリで埋葬され、後に墓地の移転に伴い遺体も行方不明になってしまいました。

旅先で亡くなってしまった母を想いながら作曲されたのでしょうか。このヴァイオリンソナタには、そんなモーツァルトの気持ちが反映して短調で悲哀のこもった曲に仕上がっています。

モーツァルトの作品としては、数多くの傑作オペラ（「魔笛」「ドンジョヴァンニ」「コジファントゥッチ」など）の他、交響曲、ピアノソナタ、合唱曲など数え始めると限りなく代表作が出てきてしまうのですが、この「ヴァイオリンソナタ K304」は、地味ながらおススメの1曲です。Youtube で検索すると、さまざまなヴァイオリニストの演奏を聴くことができます。



ちょっとだけ 演奏会情報

フランクフルト・オペラ劇場 5月の演目から 子どものためのオペラ「トスカ」

5月20日(土)	13:30と15:30の2回公演
23日(火)	16:00
24日(水)	16:00
27日(土)	13:30と15:30の2回公演

R.ワーグナー作曲 楽劇「さまよえるオランダ人」

5月20日(土)	19:30
25日(木)	15:30 (祭日)
28日(日)	19:30

※「さまよえるオランダ人」は6月も上演されます